



第11回目に登場していただきますのは、今年度より事務局長に就任されました滝澤照茂さんです。26回展より青枢展に出品されて、青枢の役員として活躍され、聡明なお人柄から新事務局長に抜擢されたのは必然であろうと感じています。

今回は、滝澤さんと私・米谷が同じ常磐線沿線である事も、駅前にて待ち合わせ、居酒屋で飲み交わしながらの楽しい取材となりました。

漁港の風景や、躍動感のある漁夫の姿を描かれる滝澤さんの創作のルーツに迫れば良いと思います。また、今後の青枢を牽引していただく、滝澤さんの人となりを紹介出来る好機であるのも幸いです。



2000年制作「岩礁」の前でポーズ

滝澤さんは東京・深川の生まれ、活発なスポーツ少年で、父親の勧めもあり小5より柔道をされていたそうです。しかしお父様の薦める高校に入学してからは、一転して運動部には反対されて、もともとお絵描きが好きであった事も、美術部に入部されます。

この時、一方的に進路を決められた事を出る事を決意されたそうです。

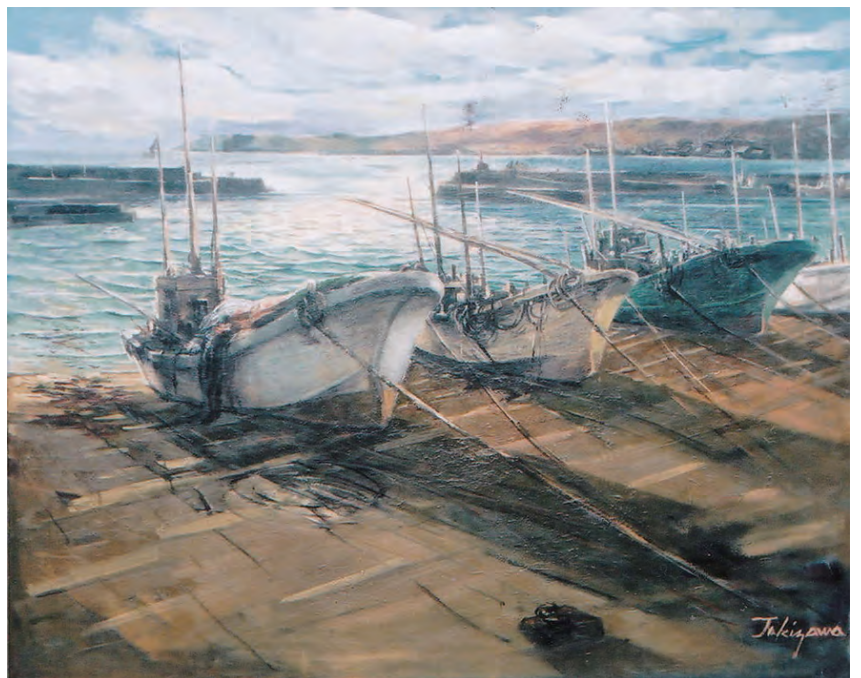
美術部では顧問が独立の石井武夫先生であった影響もあり、美大進学も考えられたそうですが、やはり親の反対と経済的な事もあって、そのまま付属の大学にやむなく進学。しかし、そのタイミングで反対を押し切った一人暮らしを決行されます。

大学を卒業されて一旦会社員となるも、美術への憧憬を捨て切れず、勤めながら東京デザイナー学院の夜学に通われて、その間にデザイン広告業を独立開業されます。

仕事は順調に成功し、10数名もの従業員を使っていた時もあったそうですから、素晴らしいですね。

夜学の学生と社長業の二股生活はさぞや大変だったのではと推察されますが、デザイン学校を卒業されてすぐに、現在の奥様と結婚が決まり、ご長男が誕生され、更にご長女が年子で誕生され、てんてこ舞いの日々であったと語られています。30代までわき目も振らず仕事一筋。がむしゃらに走り続ける中で、筆をとり画布に向かうのが素の自分を取り戻せる唯一の癒しであったとおうかがいしましたが、普通はただ休んでしまいそうな時間を、実に有意義に過ごされて、ただの趣味で終わらないところが、滝澤さんの前向きな姿勢にあらわれていると思います。

大に見習いたいものですね。



1998年制作・F100 漁港

滝澤さんの青枢会との出会いは、趣味のゴルフ研修会で青枢の会員である中澤先生と懇意となり、お互い絵を描いているという話から紹介されたのだそうです。

ここにも素晴らしい出会いがありました。

そして、青枢に席を置くようになってから、大作に取り組む本格的な創作活動が始まり、更にご自身の絵画教室を開設される展開へと繋がっていきます。



2000年制作・F100 漁夫



滝澤さんは、主に港の風景・漁船とか漁夫を好んで描いていらっしゃいます。うかがったところ、高校時代の美術部で、顧問・石井先生が率いて千葉の外房で合宿をされていて、その時にいつも漁港で絵を描いていらしたとか。その体験から現在も漁港に題材を求めて通われているとの事。

1週間くらい20~30人でお寺に泊まり込み、自炊しながらの夏合宿という、文化部の活動にしては活発で羨ましいような体験が、今の制作に繋がっていらっしゃるのだなと感じました。



41回青枢展・東京都知事賞受賞作品 F100×2 漁婦

大胆な構図と色彩が力強く、躍動感が素晴らしい、受賞に相応しい大作です。空間の思い切った使い方が秀逸で、会場で拝見したときは目を見張りました。



1998制作 「漁夫」F100 独立展入選作品

光と影、シルエットが印象的で、表現を模索されている意欲作ですね。

現在、滝澤さんはアトリエゼザンヌという絵画教室を開設され、複数の場所で手広く絵画指導を行われています。

仕事も落ち着いてきたころ、絵画の魅力を自分の周りの人達にだけでも伝えたいという思いを強く持たれ、もっと身近なものとして地域の皆さんに芸術を楽しんでもらう事をコンセプトにされたそうです。

事業を立ち上げ、人との繋がりの中で仕事をされていると、昔、お父様が猛反対した事も、今では満更ではないなという気持ちであるとお聞きしました。

また、色々な団体に出品するも、青枢会の自由な空気が、最も自分を奮い立たせてくれるとおっしゃっています。

これから事務局長として、青枢会を力強く引っ張っていただけるものと、大いに期待しています。

左中央) 42回青枢展・文部科学大臣賞受賞作品 F100×2 「日の出前」受賞の寸評がありますので、以下に転載します。

日の出前、漁師たちの船出のシーンである。飛沫が上がり、男たちが立ち上がる波に向かって船を押していく様を、力強いタッチで描いています。

船の先端を左に寄せて、姿を現しはじめた朝日を右に置き、その対角線の向かう先に男達の希望、そして私たちの未来がある。

そんな比喩を感じさせる力のある作品で、文部科学大臣賞に相応しい力作です。米谷



左下) 2016年新作・S100 「キルギスの民」

ラクダに乗った遊牧民を描いた作品でしょうか。

これも大胆な構図で配置された、遠近感のあるパースが印象的な作品です。連作で描かれているようで、原画を拝見するのが楽しみです。

編

集

後

記

青枢通信も10号を超え、今後更に記事を書いていくにあたり、テーマなども新たに設定したいと考えています。

また、今までは役員中心に取材してきましたが、今後は会員・準会員にもスポットをあてて展開していきたいと思っています。

皆様からのご意見もお聞きしたいと思っていますので、遠慮なくご提案いただければ幸いです。

少人数の青枢会は、会員の皆様全員がスターであり、重要な存在です。会員相互の理解と結束を強く持ちたいという願いから、青枢通信を発案し現在に至ります。

どうぞ今後の青枢通信をお楽しみにお待ち下さい。

米谷